

北播磨地域ビジョン委員会「生活分科会」 第4回記録

1 日時：令和2年9月17日（木） 18：00～19：15

2 場所：兵庫県社総合庁舎本館入札室

3 参加者：生活分科会メンバー7名出席、3名欠席

4 実践活動計画について

(1) 宿題メールから

成果物の普及方法については、(中略) 色々な方法があるが、(中略)、その前提となる活動のテーマがまだメニュー不足である。次回、具体的に普及するテーマを、宿題として考えてきていただきたい。

(例) 略

(2) 実践活動の内容について（宿題発表）

〇〇：障害者にとって、避難所のトイレはどこへいけばよいか。どこへ逃げたらよいか避難の仕方がわからない。防災マップの見方がわからない。

〇〇：弱者にとっての防災は、避難者にとって十分でない。訓練に弱者が出てきていない。

〇〇：災害弱者にとっての防災・減災を知る。災害が多いので地域でささえしていく。警察と高校生との寸劇をしていく。関係団体の方に監修していただいて学べる寸劇をしていく。寸劇を企画実演していく。事前に関係団体で話を聞く。

〇〇：寸劇したことある。耳の聞こえない方は、避難所でも何も聞こえない。

どこへ避難したらよいのかもわからない。聞こえない方、見えない方、車椅子の方といっしょにつきあって不自由なことがわかる。耳の聞こえない方と指点字をしている。伝え方がある。円山川の台風の時聞こえない方が亡くなられた。どうやって助けるか。加東市には4~5人耳の聞こえない方がいる。メールとかで大丈夫かと聞く。ラインでつながらないと駄目。車椅子も誰かに助けてもらわないとできない。頭でなく実際にやっていく。障害者全体を寸劇で表したらよい。

〇〇：車椅子と耳の聞こえない方を一緒にはしにくい。

〇〇：104歳のおばあさん、認知の親、引きこもりの息子がいるが、個性だと楽しんでいる。災害に対して、阪神・淡路大震災をテレビで見て色々な支援があったが薄らいでいく。弱者について多可町は敬老の日の発祥だが校区ごとにボランティア団体がある。少人数のグループが沢山ある。避難場所は公民館であり、平時は住民の集まる場所で、親父朝食の会、おばあちゃんの会とかやっている。公民館が身近な場所としていつも開いている。危機感がなくなっている今の世代に阪神・淡路大震災の体験を伝えていく。防災トランプがある。北播磨であった災害をDVD、紙芝居で伝えていけたらよい。鵜野飛行場に大阪の学生が見学に来ていた。災害防止のためのダムとかが観光名所になる。八千代の工事現場を見に行くとか。

〇〇：下滝野では今堤防を高くする工事をしている。

〇〇：災害を防止しようとする場所を、子どもたちの教育という観点でマップで示す。浄水場は見学コースになっている。鴨川ダム役割を学ぶ。
今からの世代に建造物を教える。

〇〇：寸劇で、避難所で食べ物が当たらない内容を演じる。

〇〇：鉛筆を落としたことを知らせる寸劇で、子どもたちは聞こえる幸せを感じる。私たちにとって普通のことでも障害者にとっては大変なことだ。
寸劇 15分、あと手話を学ぶとか。

県民局：障害者のことを知るためにどういうところへ行ったらよいのか。

〇〇：耳の聞こえない方たちの団体が北播磨にある。西脇市の林さんが会長をしている。ヒントをいただくことができる。

(3) 企画部会 (9/28) 提案 (おおよそのまとめとする)

① 災害弱者を地域で守る講座の開催

防災マップの見方や、災害弱者を中心とした地域住民を災害から守るための正しい知識を学び、災害時に適切な行動が取れるように、普段から災害弱者に対する思いやりと絆に満ちた地域づくりと自主防災組織・体制の確立に資する。

② 災害弱者を材題にした寸劇の実施

避難所で適切な援助を受けることが難しい身体障害者に対する課題を学校や地域で寸劇によって披露し、避難所生活が困難な災害弱者の支援について理解を深め、避難所での実際の支援に結びつける。

③ 災害復旧現場（防災工事）や防災建造物の見学会の開催

災害現場の復旧・防災工事やダムなどの防災建造物を見学することによって、災害・防災に対する意識を高め、自然災害の怖さや危険箇所の実際を理解し、日常生活における災害への備えの必要性を意識づける。

④ 災害弱者を守るマップ等の作成

災害弱者の目線から防災マップを作成し、災害時に役立たせるとともに、地域住民の意識の変革をめざす。あわせて、防災カルタの作成により防災意識の日常化を図る。

(4) 次回開催予定 10月1日（木） 18時～、県民局入札室

5. 閉会